

<論説>H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(下)

著者	水野 節夫
雑誌名	社会労働研究
巻	24
号	4
ページ	49-84
発行年	1978-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018125

H・P・ドライツェルにおける 役割論の展開（下）

水野 節夫

（四）

（Ⅰ）〈相互行為状況における役割行為をめぐる諸問題〉

ドライツェル自身はここでの課題を「役割行為の一般規則の追求」と表現しているが、実際に論じられている内容からしても、ドライツェルの役割論における相互行為状況の重みからしても、右のような標題で集約するのは、さして間違っていないように思う。それはともかく、ドライツェルがここで扱っているテーマを順にあげておくと次のようになる。

- （1）〈役割行為との関連でみた場合、「状況の定義」はどのような形でおこなわれるのか〉
- （2）〈役割行為の一般的前提は何か〉
- （3）（a）〈相互行為状況で対面する相手が何者であるかはどうやって認知するか〉
（b）〈相互行為状況内で自己をどういう人物として見せるか〉

H・P・ドライツェルにおける役割論の展開（下）

(4)〈危機的な相互行為状況をどのようにのりこえるか〉

これらのテーマはすべて、相互行為状況における役割行為のありようをさまざまな側面から照らしだそうとする試みとしてみることができる。以下では、ここにあげた順に議論の要点を紹介することにしよう。

(1)〈役割行為との関連でみた場合、「状況の定義」はどのような形でおこなわれるのか〉

役割行動はすべて状況内でおこなわれるわけだが、「個人は異なった数多くの役割行為をおこなうのだから、自分の役割のうちの役割がどの状況にふさわしいかについて、何らかの形で決着がつけられなくてはならない。」(157) 日常の経験にてらして考えてみればすぐわかることだが、多くの場合、この決着は個々の役割行為者にゆだねられているわけではない。たとえば、妻や子供たちと朝の食卓をかこんでいる時は父としての、あるいは夫としての役割、会社へ行けばサラリーマンとしての役割といった具合に、個々人の生活世界が空間的にも時間的にも社会によってさまざまな形で構造化されている点をドライツェルは指摘する。ある特定の状況においてどの役割がふさわしいかを決定する要因の一つとして、社会的状況があげられるわけだ。

社会的状況は、そこでどのような相互行為がおこなわれているかに従ってさまざまに分節化することができる。ドライツェルはここでE・ゴフマンの「社会的な催し」(social occasion) という概念に注目する。社会的な催しとは、たとえばパーティー、会社での仕事、ピクニック、オペラの夕べといったように、社会によって決定された催しのことである。大部分の相互行為状況は、そうした社会的な催しによってあらかじめ規定されているわけで、「役割行為者は、自分に何が期待され、どのようにふるまうことができるか、もしくはふるまわなくてはならないかについて、大体のところは知っている。」(160)

ところでドライツェルは「ある関連テーマ群の範囲内における状況のテーマの規定」を「状況の定義」と呼んでいる。これに関連させて言えば、社会的な催しによって役割行動と状況とのある程度の方向づけがなされ、時によっては「状況の定義」までなされることが事実だとしても、つねに、あらかじめ「状況の定義」までおこなわれているわけではないという点にも留意しておかなくてはならない。多くの場合、社会的な催しは相互行為状況がどの関連テーマ群の範囲に属するかを確定すると見た方がより適切である。その意味で、社会的な催しは相互行為状況の大きくを決定するといえることができる。このわくの中で、その場に居合わせるか関係のある相互行為の相手との関係によって個別的な「状況の定義」がなされていく。その際、通常、社会的地位の高い者ほど状況を牛耳る可能性がそれだけ大きいことは言うまでもない。こうして「状況の定義」はどのように行なわれるのかという問いに対して一般的に答えるとするれば、それは「相互行為連関の意味に応じて、役割構造によってあらかじめ与えられていたり、あるいは役割行為を通じて相互行為過程の中ではじめて確定されうる」(166)ということになる。

(2) へ役割行為の一般的前提は何か

ドライツェルがここで追求しようとしているテーマは、そもそも相互行為状況の役割構造が成立するための一般的条件は何か、というものである。この問題を彼は、相互行為過程を交換関係としてとらえようとするホマンズの議論を批判するという形で展開している。ホマンズの功利主義的議論は「他我の期待に対する自我の同調は自我の期待に対する他我の同調を強める、云々」(169)といったホメオスタシス的な相互性の原理に立っているが、そうした原理は社会の支配構造や個々人の衝動構造の介入によって絶えず妨げられているのが現実である。したがって、相互性の原理だけで相互行為過程の経過についての説明を試みるのは不十分ではないか、というのがドライツェルのホマン

ズ批判の要点である。これにかわってドライツェルが提唱するのが一般的な相互性規範 (Reziprozitätsnorm) である。「この規範は、状況や役割に固有なあらゆる分化に先だって、相互行為過程に一般的に関係づけられた定型化図式の一構成要素である。」(170) という。しかも、この規範は相互行為過程の「インフォーマルな」規則として考えられている。したがって、ホマンズの相互性の原理がエゴの利害の論理であるとすれば、相互性規範の方は、相互の役割行為者に要求される「インフォーマルな」規範の論理であるといえよう。この規範の故に、役割パートナーに対する権利と義務とを同時に含みもつ役割という観念が成立可能となるわけである。⁽¹⁾ こうして、ドライツェルは相互性規範の機能として相互行為過程の安定化作用をあげている。もちろん、経験的に見た場合には、相互行為過程において相互性規範がつねに守られているというわけではない。(そして、規範の侵害が原理的な形で持続的に見られる場合、そこには搾取関係が成立しているのだという。) しかしいずれにせよ、「相互行為過程では、少くとも相互性規範に目くばりすることなしには、どのような役割行為も成立不可能だ」(174) というのがドライツェルの主張である。

(3) (a) へ相互行為状況で対面する相手が何者であるかはどうやって認知するか

社会的な催しにしろ相互性規範にしろ、そうしたもののだけでは、相互行為状況にいる相手が自分に対してどんな役割行為をしているのか、したがって自分にはどのような役割期待が課されているのかを認知するのに不十分である。では、この間隙はどううめるのか。どうやって追加的な情報を手にいれるのか。これがここでの問題である。

かつては、相手の社会的地位や身分を表示する徽章 (Statuszeichen) のようなものがあつた。しかし現代社会の平等化・平準化傾向によって、そうした目印にたよることはむづかしくなっている。とすれば、次にあげられるもの

としては、相手の役割を指し示す役割属性 (Rollenattributen) がある。これによって相手の役割がわかれば、相互行為状況の性格についても示唆されるところが大きいはずだ。まず目に見える形で役割属性がある。たとえば病院で白衣を着た男性がいれば、彼は医者であろうと推測がつく。しかし、いつもこのようにはっきりしているわけではない。かりに先の男性が病院の待合室に私服で登場してきたとすると、初対面の者には、彼は患者とも訪問者とも (確率は低い) 医者ともうけとれよう。要するに相手は何者かははっきりしないのである。こうなると、さしあたりさしきわりのない一般的な礼儀作法で接するしか術はない。しかし、これでは相手の正体をつきとめる可能性はきわめて限られてくる。それでも相手は何者かを知りたいとしたらどうなるか。具体的な相貌をもった相手ともし顔と顔をつきあわしているのである。その相貌や服装等々から相手についての特定のステレオタイプ化されたイメージがつくりあげられてくる。もちろんのことながら、相手がどんなしゃべり方で何を言うかとか動作によって、このイメージがさらに分節化されていくことは言うまでもない。ドライツェルは、こうしたイメージのはたす機能に注目する。つまり、なるほどこのイメージには相手を見誤る危険性がつねに秘められているが、しかし相手がどういう人物かを見定めるための定型化図式をイメージが提供していること、しかも、イメージは相手をいわば一つのゲシュタルトとして把握することになるために、その人物の自我同一性と関係づけられる傾向があることをドライツェルは指摘する。

ここで先の役割属性との関連をつけておけば、たとえば職業上の役割に由来するイメージのように、しばしば、特定の役割や役割属性の刻印をイメージがうけていることがわかる。逆に言えば、イメージを媒介として役割属性が推測しうるケースがかなりあるということである。

(3) (b) へ相互行為状況内で自己をどういう人物として見せるか

前項(a)でのテーマが、どのようにして相手の正体を見定めるかという問題であったとすれば、ここでは、自分をどういう人物として相手に見せるかという、逆のテーマを扱っている。これは役割行為における情報コントロールの可能性をめぐる問題と言えらわすこともできるが、彼はこの問題を考えていく手がかりとして「役割表出的行動」(rollenausdrückenden Verhalten) と「役割下支え的行動」(rollenunterstützenden Verhalten) とを区別する。

役割表出的行動とは、役割行為における演劇的要素のことであり、これによって役割行為者は部外者に対して、彼自身や共同の役割行為者の一種芝居がかった理想像を創りあげていく。たとえば、教師の視線が自分たちの方に向けられている間だけ、いかにも勉強に熱中しているふりをする学生たちの行動とか、社長がはいってきた途端にせわしくタイプライターを打ちまくる社長秘書の行動がそれにあたる。自分の担っている役割にふさわしくふるまおうとする「へらしさ」の演出(impression management) が役割表出的行動に含まれることは言うまでもない。なお、ドライツェルは「役割の自由裁量度が高まれば高まるほどへらしさ」の演出に対する規範的拘束は少なくなる」(181)と指摘している。

役割表出的行動が「へらしさ」の演出といった形で積極的に役割を演出していくものであるとすれば、役割下支え的行動とは、役割行為が台なしもしくは不可能にならないように配慮するという形で消極的に役割演出をおこなう行動のことである。たとえば、会議の席上で突然叫びだしたり、そこでのテーマとは関係のない話をしたりするようなことがあるば、役割からの逸脱と考えられるわけだが、そうしたことのないように役割行動を自己制御することは、この役割下支え的行動に含まれる。また肉体の統御が役割行為の一前提条件であることは言うまでもない。さらに準

備不足だと役割行為はうまくいかない。ドライツェルは、そうした役割行動の自己制御の一端を担っているのが、役割関係にある他の役割行為者である点に注意を促がしている。「役割下支えの行動様式が他の役割の担い手の役割行為の安定にも関連しているということ——これは、相互行為過程にある役割が相互に関係づけられているという事情によって可能とされ、また相互性規範によって要求されている。」(182)

われわれは先に、役割概念が人間存在にとってもつ意味との関連で、A氏の医者としての行動を評して「A氏は医者としての役割を演じている」のではなく、「医者としての役割になりきってその役割を生きているのだ」と述べたことがある。大部分の場合、後者の方がA氏の医者としての行動を言いあらわすのには、より適切だと思うが、役割表出的行動や役割下支えの行動の議論をふまえて言えば、そうした認識の仕方に修正を加えなくてはならないだろう。つまり「役割を演じる」と「役割になりきってそれを生きる」との間の距離は、場合によっては意外に近いこともあるということである。たとえば、A氏は医者としての役割になりきって生きていると同時に、医者である限りそうすることを強制されているわけだが、A氏が医者という職業に疑問を持ちながら、にもかかわらず医者として患者に接している場合を想定してみると、その場合彼は医者としての役割表出的行動もしくは役割下支えの行動をかなり意識的にとらざるをえないであろう。その限りで、A氏は医者としての「役割になりきってそれを生きている」というよりも、むしろ医者としての「役割を演じている」といった方がより適切だと思われる。この点に関連してドライツェルは「役割との距離が大きければ大きいほど、また役割との同一化が少なければ少ないほど、それだけ行動を演出する必然性と可能性は増大してくる。」(187)と述べている。こうした認識をふまえて、次に役割との距離をめぐる問題に移ることにしよう。

(4) 〈危機的な相互行為状況をどのようにのりこえるか〉

まずはじめにはつきりさせておかなくてはならないのは、「役割との距離」ということの意味である。ドライツェルは、ゴフマンの「ロール・ディスタンス」(Rollendistanz)の議論に見られるあいまいさを批判して二種類のロール・ディスタンスを峻別することによってこの問題に接近する。

たとえば、遊園地ではしやぎまわっている小さな子供達に混じって遊び興じていた少しばかり年上の子供が、大人の眼を意識した瞬間から、「自分は連中とは違ってもう大きいんだ」ということを示そうとして、しらけた顔をして見せるといった場合、その子供はロール・ディスタンスをおこなっているのだが、彼が否定しているのは小さな子供という役割そのものではなく、彼がその役割と同一視されることなのである。したがって、この場合には、ロール・ディスタンスとは役割同一性から距離をとる行動のことである。

他方、ゴフマンは、ロール・ディスタンスの別の例として手術にたずさわっている外科医の行動をあげている。そこでロール・ディスタンスと呼ばれているのは、看護婦とふざけたり、患者の症例について皮肉な発言をしたり、手術室でタバコをすったりといった、手術中の外科医としての役割に期待される真剣さや手術上の能力発揮とは一見調和しない行動のことである。この場合、その外科医はそうしたふるまいを見せることによって、かえって自分が外科医としての役割を十分余裕をもって遂行しているのだということを示しているわけである。つまりここではただ単に期待されていることから距離をとっている (Distanzierung von bloß Erwarteten) わけで、こうしたロール・ディスタンスは役割期待に属する主体的営為の表出的側面と捉えることができるという。

要するに、役割同一性からの距離化とただ単に期待されていることからの距離化という、質的に異なる二種類のロ

ール・デイスタンスが区別されているわけである。⁽²⁾

先に、社会的規範が所与としてどのように与えられているかを役割期待に占める主体的営為の度合と関連づけて三分節化したわけだが、ドライツェルはこの点と二種類のロール・デイスタンスとを関連づけている。つまり、主体的営為を強く要求する役割群、したがって「役割の個性的形成のための規範」が支配的な役割群においては、ただ単に期待されていることからの距離化が重要な役割を果たすのに対して、主体的営為をほとんど必要としない「既定の役割執行のための規範」が支配的な役割群においては、逆に役割同一性からの距離化が重要な意味をおびえてくる。

さらに、外部からは見えないが自分のおかれている状況や役割から内的に距離をとっている場合も含めて、ドライツェルは次のような六つのロール・デイスタンスの形態をあげている。

A、外からは見えない行動

一、別の「意味領域」(A・シュッツ)にのがれることによって状況に距離をとる場合。

二、心の中で役割へのコミットを留保することによって距離をとる場合。

B、外から見える行動

三、イロニーや冗談、ユーモアによって自己の役割行動に距離をとる場合。

四、二つの異なった準拠集団や準拠人に同時に話しかけることによって距離をとる場合。

五、状況内で時折り役割を変えることによって距離をとる場合。

六、役割としての性格を過度に強調することによって距離をとる場合。

「これらのロール・デイスタンスが可能となるのは、……関連テーマ群体系もしくは……組織や施設の統制体系に

裂け目が存在する場合に限られる。」(193) このように、ロール・ディスタンスは一種の「はみだし」可能性の指標と見ることが出来るわけだが、ここで注意しておきたいのは、これら六つの形態がために並べられているのではなく、はみだしやすさ、もしくははみだし可能性との関連で意図的にこの順序が採用されているということである。つまり、ある状況もしくは役割が役割行為者に及ぼす強制の度合は、別の「意味領域」にのがれるというロール・ディスタンスの第一形態で最も強く、第二形態がこれにつき、役割としての性格を過度に強調するロール・ディスタンスの第六形態が最も小さい。

もう一つ、ドライツェルのロール・ディスタンス論の特徴として注目しておきたいのは、役割から距離をとるといふことが主体的営為の発現として捉えられている点である。⁽³⁾「個人とその役割との距離は、……その個人に固有な主体的営為の可能性としてのロール・ディスタンスと直接関連している。」(194) こうしてロール・ディスタンスは「状況ののりこえ」として位置づけられることになる。ここで「状況ののりこえ」というのは、何らかの形で役割行為を困難もしくは不安定にする状況ののりこえなのだが、彼はそうした状況として次のような三つの場合を想定している。第一は、複数の役割期待の実現を同時に迫られるアンビヴァレントな状況であり、第二はその逆に、行動規制の網の目があまりにも厳しくて息をつくこともできないような抑圧的状況、そして第三は、たとえば平社員だった者が近く係長に昇進することが内定したという場合のように、現在自分が占有しているポジションから別のポジションへと移動する可能性が強まっている状況である。

(Ⅱ) へ役割体系への欲求構造のくみこみをめぐる諸問題——学習環境論序説——

ドライツェルの役割論の特徴の一つは、役割概念の中に個人の主体的契機をくみいれることによって、役割とそれ

を担う個人との関係を相対化もしくは流動化させた点にあると思うが、彼はこうした視点も生かしながら、ここでは個人の欲求構造と役割体系との関連づけを次の順序で論じている。

- (1) 〈社会的規範と個人的欲求〉
- (2) 〈自我同一性の形成過程、あるいは社会化の三局面〉
- (3) 〈役割行為と情動的欲求〉
- (4) 〈社会化過程の二重の機能〉

ドライツェル自身に即して言えば、行動障害の社会的発生 (Soziogenese) を探るというのが、いっでの彼の問題関心なのであるが、私としては、そのための枠組を提供していると思われる、役割体系への欲求構造のくみこみ、さらには役割体系との関連で論じられている個人の主体形成過程論に焦点をあてる形で跡づけることにしたい。

(1) 〈社会的規範と個人的欲求〉

ドライツェルがここで試みているのは、人間の本性的所与として存在する個人の衝動構造ならびにそれに由来する個人的欲求を役割論の中にくみこむというテーマである。彼によれば、個人の衝動構造は人間の本性上すでに所与として与えられているものではあるが、同時に誕生の瞬間から社会による規制の下におかれており、しかもその役割を担っているのが、ほかならぬ社会的規範なのである。ドライツェルは社会的規範の二重の機能として衝動の規制と欲求充足の規制とをあげている。「本性的所与としての衝動は、社会化過程において文化的規範の内面化を通じて、社会が受容可能な形で構造化される傾向がある。」(223) しかし、この構造化は決して完璧ということはありえない。衝動のうち、あるものは抑圧され、別のものは昇華され、さらに別のものは社会的な水路づけをされるわけだ。しかし、

それだけではない。社会的役割には明示的な行動上の指針とともに主体的営為が役割期待としてくみこまれているわけだが、こうした点に端的に示されているように、適応と自律とを個人に要求するというのが現代社会の特徴であるという。

社会化の第一局面（後述）における衝動規制を通じて、アモルフな衝動は、個性的ではあるがしかし社会的に形成され方向づけられた欲求となる。この欲求充足の手段を規制するのも社会的規範なのであるが、ドライツェルは非常に逆説的な表現で社会的規範の働きを述べている。「社会的規範は、そもそも欲求充足を可能とするために、欲求充足の可能性を制限する。」（224）というのは、「規範化とは、行為に対して若干の可能性を開くと同時に別の可能性を排除してしまうということ」（224）だからである。

では社会的規範はどのような形で欲求充足の可能性を制限するのか。ドライツェルは、個人的欲求が社会的役割にくみこまれるという形で水路づけされると考える。つまり個人的欲求は、特定の役割行為にその表現を見いだすところの、ポジションに付随した利害関心（Positionsinteressen）と同一化されることによって社会的に正当化され、したがって統合されうるというわけである。より一般的に言えば、「欲求は社会の利害関心という形をとって正当化されうるし、逆に、社会の利害関心は欲求という形をとって役割行為者の動機のうちにはいりこむ。」（225）もちろん、つねにそうしたくみが成功するわけではなく、ポジションによる正当化がえられない数多くの個人的欲求や集合的欲求が存在する。興味深いのは、そうした欲求が、欲求充足要求配分の正当性をめぐる対立を惹起する抵抗のバネと考えられていることである。これと関連することだが、ドライツェルの場合、歴史的変動にさらされている社会においては、社会システムの自己維持的傾向と個人の欲求充足要求との間に、つねに潜在的な対立関係があり、そ

うした社会構造上の裂け目は、矛盾にみちた役割の諸類型や、逸脱的役割のうちにさえ統合されることのない「没社会的」感情の残滓といった形でくりかえし出現するものととらえられている。

(2) 〈自我同一性の形成過程、あるいは社会化の三局面〉

ドライツェルによれば、(1)でその概要をみた、社会による個人的衝動構造の規制と社会的役割への個人的欲求のくみこみというこの両者と結びついた形で展開されるものに、自我同一性の漸次的な形成がある。彼はE・H・エリクソンの自我同一性の発達段階論をふまえて、社会化過程の三つの局面を次のように区別する。

(i) 社会化の第一局面——とりいれ (Introjektion) と投影 (Projektion) のメカニズムに規定されたエディプス期以前の局面。

(ii)、社会化の第二局面——児童の諸同一化 (Kindheitsidentifikationen) を基本的特徴とするエディプス期ならびにエディプス期以後の局面。

iii、社会化の第三局面——本来的な自我同一性形成を課題とする青年期の局面。

以下、各局面の特徴をもう少し詳しく追ってみよう。

(i)、社会化の第一局面。ドライツェルの役割概念にとっては、役割の構成契機としての主体的営為という視点とともに、役割との同一化という視点は基本的なものであるが、その同一化を可能とさせる根底的な過程として、彼は「とりいれ」と「投影」を位置づける。衝動の拒絶を通じて自我と他我の区別がはじまると共に、充足される衝動と充足されず不満状態におかれる衝動という区別を通じて、徐々に衝動の構造化と水路づけが進行する。そして、こうした快、不快感情を基準とした「とりいれ」と「投影」の過程を通じて、後のあらゆる役割行為にとって基底的なパ

―スペクティヴの相互性が生成してくるという。興味深いのは、家族という学習環境における体験過程を媒介にして、内集団と外集団との区別や関係を個々人が体得していく機能をこの相互性が担っていると考えられている点である。そして、そうした区別や関係の体得とともに、固有な自己意識が徐々に形成されてくる。この局面での社会化の失敗は役割病理学的研究では接近不可能な行動障害(これを彼は「第一次行動障害」と呼ぶ)に導くという。役割分析的に把握できない理由としてドライツェルがあげるのは、そうした第一次行動障害が役割行為そのものを不可能にしているという事情である。いずれにせよ、ドライツェルの役割論の観点からすれば、社会化の第一局面において達成されなければならない課題は(1)社会化された衝動構造の発達と(2)パースペクティヴの相互性への可能性、という二点である。⁽⁴⁾

(ii)、社会化の第二局面。この局面においては児童のさまざまな同一化が進行する。「第一の、そして最も重要な同一化は同性の親との同一化である。」(232)この同一化が重視されるのは、それが「特殊性的な(geschlechtsspezifisch)行動期待の内面化に貢献すると同時に『社会・文化的パーソナリティー』と特殊文化的な『超自我』の形成をなしとげる」(232)という機能を担っているからである。

また同性の親との同一化は、その帰結として、性的同一性(Geschlechtsidentität)の発達をもたらすという。性的同一性の確立は同一性形成の全過程にとってきわめて重要な意義をもっているが、ここでのポイントは、生物学的性差から性的同一性が自動的にうみだされてくるのではなく、そこには子供の側の同一化が関与しているという点である。こうして、性的同一性はエディプス期における第一の達成課題として位置づけられている。

さらに、文化や社会が異なれば、おのずと性的同一性の類型も違ってくるわけだが、この点をふまえた上で、ドラ

イツェルは現代社会の特徴として、特殊性的役割行為を実現する領域がますます狭まってきているということ、つまりエロスの関係の領域と育児という領域に局限されてきているという、周知の事実を確認する。

エディプス期の第二の課題としてドライツェルがあげるのは、「超自我」形成という形をとった、一般的な文化規範や価値の内面化である。「同性の親との同一化は完全な成功をおさめないで……子供は、両親の優越の道德的側面を内面化することによって、そのフラストレーションを埋めあわせる。」(234) ドライツェルは、この内面化を、役割行為の際の相互性やへらしさの演出といった、後の役割行動の基盤となる準制度的なコミュニケーション規則のコンテキストと関係づけている。

彼はまた、この内面化が現代において構造的に困難な事情の下におかれている点も指摘する。つまり、現代社会のしくみの故に、両親に代表される道德的態度の内面化として進行するはずの過程が質的な変容をこうむる可能性が大きいと見る。というのは、道德的態度の内面化が進行するためには、両親の権威が社会の支配的な欲求規制システムと一致していなければならないはずなのに、その前提があやふやになっている。現代の文化産業はフロイトの患者たちの出身階層たるブルジョアジーに見られたような、相対的に安定した構造をもった価値世界というものをゆり動かし凌駕してしまい、その結果両親の権威が社会的なよりどころを失ってしまった。こうして父親の力との同一化は、もはや道德的態度の内面化につながるわけではなく、ただ全面的抑圧に対する防衛の機能を果たしているというのである。

そうした困難な事情があるにせよ、このエディプス期を何とかのりきると、幼児性欲の抑圧 (Verdrängung) を特徴とする、遊戯的な役割同一化の段階がこれに続く。この時期は学習の時期である。「役割同一化はまだ暫定的であ

って、つねに遊戯としてあるいは一時的なものとして体験される。そうした同一化は、状況に係づけられた役割群、ならびに（学校や青少年団体という）組織に係づけられた役割群において、とりわけ『役割課題達成のための規範』に導かれた行動の訓練に貢献する。（235）この時期に重要なこととして彼は次の二点をあげている。一つは、急激に変貌をとげつつある技術的環境世界への適応の問題であり、もう一つは世代間の関係についての見通しがきき、しかも意味があると体験しうるような役割構造の中で児童が育つということである。

Ⅲ、社会化の第三局面。思春期以降になると、児童期の同一化に見られた遊戯的性格が真剣なものに変容する。この時期の最も重要な問題としては自我同一性形成の問題があげられている。「同一性形成の問題は、青年期が典型的な形で結びついている規範的危機の核心である。」（236）ドライツェルはこの危機の内容を大きく三つに分節化して把握する。それらは(1)最後決定的な自己定義をめぐる危機、(2)性器愛の完成をめぐる対人的危機、(3)職業上の役割において必要とされる自己主張をめぐる危機、である。こうした三重の危機は、エリクソン流に言えば「同一性拡散」の危機として青年たちに迫ってくるわけだが、それらをのりこえていく上で「心理社会的モラトリアム」（E・H・エリクソン）という、同一性形成のためのインフォーマルな実験場が重要な意義をもつという。

青年が社会と対峙する過程で直面しやすい問題としてドライツェルがあげるのは、個人的欲求を社会的役割のうちにくみこむことがむずかしいという点である。というのは「既定の役割執行のための規範」や「役割課題達成のための規範」の支配する世界には、ポジションに付随する利害関心に青年たちの個人的欲求を同化させていく可能性が乏しいからである。ドライツェルはまた、この点に全体主義的イデオロギーや集団に若者たちが非常に感染しやすい理由を求めている。

個々人は青年期において潜在的な同一性拡散の危機にさらされているわけだが、ドライツェルはこの危機が最大のものと考えており、これがのりこえられれば、それに続く成人期のさまざまな危機は自我同一性にとってそれほど脅威とはならないと見る。ただし、ここで見逃してならないのは、彼が次のようにことわっている点である。「ここで前提されていることは、社会化過程のなかから強固な自我同一性をもった個人が形成されてくるということである。」(239)

これ以降の問題は役割同一性の確立に関係している。とりわけ、労働を期待される役割、力量を求められる役割、援助を期待される役割、関わりを求められる役割という四つの役割類型が重要な意味をもってくるが、ここでも、自我同一性と役割同一性ならびに役割同一化とは相互に影響しあう。つまり一方では「自我同一性は多様な特殊役割的行動スタイルを統合する中心もしくは媒介機関としての機能を担っている」(239)わけだが、他方「自我同一性の形成ならびに安定は、相互に矛盾のない特定の役割同一化の助けをかりてのみ可能とされる」(240)からである。

(3) 〈役割行為と情動的欲求〉

個人的欲求の社会的正当化としてポジションに付随する利害関心を考えることはすでに触れた。しかし個人的欲求と社会的役割との関係はそういったものだけには限られない。個々人の情動はさらに積極的に役割行為の必須な契機として期待されているとドライツェルは見る。「リビドーと攻撃衝動は情動的実質をもったものとして役割行為の中にはいりこむ。……しかもそのはいりこみ方は二重である。一方では、特定の役割によって特定の度合の情動的負荷が役割行為に期待される。他方、感情的緊張が、役割同一性をうみだす同一化過程には伴なうものだ。」(243)かくして「同一化が強まれば必然的に情動性も強くなる」(244)とすることができ、このことはまた、自我同一性の安定

にとっても情動的なもののはたす役割は見のがせないということである。同一性拡散のような危機的な事情のもとで、役割行為が混乱をきたす理由は情動的欲求が役割行為のうちにうまく統合できていないという事情に由来する。こうして自我同一性の形成とともに情動の制御 (Affektkontrolle) の達成が役割行為を可能にする前提条件として要求されることになる。(なお、先の役割下支え的行動についての議論を参照されたい。)

なお、役割行為に情動的内実が含まれこまれていることによって、相互行為過程における共感的接触や認識の可能性が開かれてくるとドライツェルは把えているが、これはすぐれた指摘だと思う。

情動の制御の問題も含めて役割行為における欲求充足の可能性との関連で、ドライツェルは〈Rollenhaushalt〉という重要な概念を提示してくる。これは、ある個人が自己の活動圏の中で担っているさまざまな役割の全体を指し示す言葉である。そうした意味を含みもっているという点をふまえた上で、以下ではこれを「役割のレパートリー」と呼ぶことにする。この概念が重要となってくるのは、個々人が役割行為を続けていくためには、一方で役割行為において一定程度の欲求充足がなされていなければならないはずなのに、他方個人の担う役割はすべて同じようには情動を満足させえないという事情に由来する。たとえば、規律服従を強要される役割のようにある役割がその担い手の情動的欲求を不完全にしか充足しない場合を想定してみよう。その役割にたずさわっている限り、欲求不満が蓄積されることには変りがないにしても、それを担う個人の「役割のレパートリー」の中に、その代償となるような役割が存在するかどうかによって、その個人に対するフラストレーションの影響はかなりちがったものにならざるをえない。ある個人の「役割レパートリー」を問題にするという視点は、情動的に中立的な役割と感情的に満足を与える役割との間の均衡がどのように処理されているか (T・パーソンスの「緊張処理」 (tension management)) を探る上で

欠かすことができないのである。

ドライツェルは現代社会の特徴として、数多くの役割規範が情動的な中立化傾向を示している点を指摘する。現代社会における機能の複雑化を反映し、行為連鎖がますます長くなり、個人的には相手を知らないのにその相手と相互行為をせざるをえないという事情の下では、この傾向は不可避免的に強まらざるをえない。

ドライツェルはこの傾向を示すものとして「規範の過剰な厳格さ」(Überpräganz der Normen)をあげる。これは、行動規制が厳格すぎるために、役割行為の必須な契機である個人のイニシアティブに対する配慮がまったく欠如している状態のことである。言いかえると、フォーマルな規範に準拠しては、どうい行為目標が達成できないためインフォーマルなやり方をとることを余儀なくされるわけだ。そこでは、「たてまえ」と「本音」の二重性⁽⁷⁾がいわば常態化している。

役割規範のこうした過剰な厳格さに直面した場合、役割行為者はどのように反応しうるだろうか。本人の役割レパートリーによる代償可能性の有無、状況もしくは行為野の抑圧的性格の度合、本人の自我同一性の強度とあり方——こうした事情をふまえながらドライツェルは次のような四つの反応の仕方をあげている。

(1)、別の役割による代償——当該の役割において発揮されえない主体的営為は意識的に抑制され、別の役割にふりむけられる。これは当該役割に統合されていない情動を投入しうる別の役割が本人の役割レパートリーの中にあれば、の話である。

(2)、攻撃者との同一化——「役割行為者は統合されていない情動を抑圧的な役割期待に投影する。これによって、彼の主体的営為は『既定の役割執行のための規範』にしたがった行動に攻撃的な負荷を加えたものとなる。」(254)

(3)、役割期待に対する反抗——「主体的営為は統合されていない。つまり、それは役割によって期待される地平からはみだしている。……主体的営為の動員が役割期待に対抗してなされるので、ここではアノミー的対立がひきおこされる。」(254)

(4)、圧迫に対する神経症的反応——「主体的営為はその展開に必要な余地を拒絶され、いわばせきとめられてしまう。統合されていない情動は、心的、心理身体的反応の助けをかりて出口を探し求める。この反応は、役割行為には属さず、また役割規範に対する適応でも抵抗でもなく、ただ自我同一性の、そして時には役割属性の弱体化に導くだけである。」(254)

(1)のバリエーションとして彼は役割同一性が過度に情動を負荷される場合に言及している。これは、人間に関係づけられた役割群や組織に関係づけられた役割群において抑圧的圧力が存在するにもかかわらず、役割レパートリーに代償の可能性が欠如している場合に生起しがちな傾向である。たとえば、仕事の場で欲求不満におちいった従業員が家庭内で暴君になるとか、その逆に家庭内の夫婦関係で欲求不満におちいつている夫が会社で周囲の者にあたります。場合がこれにあたる。この関連でドライツェルは、役割同一化がある一つの役割とだけに限定されてくると、自我同一性も貧しいものになると指摘しているが、注目すべき洞察と言っている⁽⁸⁾。

(4)〈社会化過程の二重の機能〉

以上のような欲求構造と役割システムとの関係に関する議論展開をふまえて、ドライツェルは役割行動との関連で社会化過程がはたす二重の基本的機能について触れている。一つは社会的な規制をうけた欲求構造の発達と役割行為への情動の統合であり、もう一つは社会的役割になりきりそれを生きる上での基盤となる自我同一性の形成である。

第2表

H・P・ドライツェルにおける役割論の展開(下)

A. 自我同一性の発達諸段階とそれらの統合機能	B. 欲求統合・情動制御の発達諸段階
<ol style="list-style-type: none"> 1. パースペクティブの相互性；自意識 2. 相互性規範 3. 一般的規範の内面化；「超自我」形成；共同行為者に対する忠誠や規律 4. 行動の演出技術；先取り的な多面的役割同一化 5. 自我同一性 6. 複数の役割同一性 7. 役割のレパートリー 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 衝動の構造化；肉体の支配 2. 情動のとりいれと投影の可能性；性的同一性 3. 自己制御＝内的な情動制御 4. 役割行為における感情的満足の子感 5. 個人的欲求の形成；情動レパートリー内のバランス 6. 役割利害関心への個人的欲求の統合 7. 代償作用

(出所, gLLG, s. 263)

情動の統合と自我同一性の発達は、ともに役割行為の前提をなすものである。また両者とも社会的な刻印をうけていると同時に遺伝的素質によっても規定されていることは言うまでもない。さらに、一方では情動の制御が十分な成功をおさめるためには相対的に安定した自我同一性の基盤が必要だし、他方、自我同一性の安定性はつねに、統合されていない情動によって脅かされているわけで、その意味で両者が相互的影響関係にあることも忘れてはならない。

ドライツェルは両者の発達段階を第二表のように整理している。「これら七つの発達段階はおのこの社会化の一段階を示しており、各段階においては、表に掲げられている課題が達成されなくてはならない。第一段階は幼児期に、第二と第三の段階はエディプス期に、第四段階は『潜伏期』、第五段階は青年期にそれぞれ対応している。なお青年期は、すでに第六、第七段階にも足を踏みいれている。最後の二つの段階は生活上の発達にお

いては同時に訪れる。また当然のことながら、現実には、その他の段階も交差しあつて重層的な錯綜状態を示している。」(262-263)

注目しておいていいと思われるのは、ここで提示されている社会化の諸段階は一応の目安であるという点である。つまり、個人の発達においてある発達段階が一度達成されればそれでもう危機におちいることはない、といったことがそこで主張されているわけではないのである。アンビヴァレントな状況とか抑圧的状況の圧力の下におかれれば、いつ退行現象がおきるかわからない。「日常的に見られる数多くの『ストレス』状況を前にして、通常、情動の制御や自我同一性は安定であるとは言いがたい。」(268) また、これに関連して、自我同一性ならびに情動制御の形成は正常な防衛メカニズムの発達と一致するととらえられている。

もう一つ重要な視点は、自我同一性と情動制御の発達が社会・文化的な学習環境の中で展開するというものである。学習環境に関しては、文化や社会層の違いに応じて学習環境が多様であることを認めた上で、にもかかわらず、個性的分化がほぼ等しい発展段階にある社会については、社会化過程における同一性形成の諸局面に対応する形で学習環境の典型的な順序というものが想定しうるとドライツェルは考える。その順序とは「はじめに、ある個人が生みこまれる狭義の家族という社会Ⅱ文化的学习環境があり、ついで、大家族もしくは幼稚園、小学校、近隣といった学習環境、それらに続いて青年期の同輩たちの学習環境、そして最後に、職業や自由時間の領域、本人の家族という学習環境がある」(261) というものである。この学習環境の役割としては、自我同一性の形成や情動の制御に加えてさらに行動の規則体系の獲得や役割同一化の達成があげられる。(Ⅱ)での議論を総括するものとして、はじめに「役割体系への欲求構造のくみこみをめぐる諸問題」という標題をかけた、その副題として「学習環境論序説」と付しておい

たが、その理由は、こうした学習環境の位置と役割に由来するわけである。

最後に、ドライツェルの自我同一性の理想像を見ておこう。「自我同一性の理念型的発達の最終段階を想定するとすれば、それは、数多くの論者が解放された社会の目標として展望しているところの、個人の自律 (Autonomie des Individuums) ということになる。」(268) このように、彼においては個人の自律が理想とされている。では自律した個人とはどんな人間か。そのイメージを彼は次のように述べている。(なお、最後の文章はかなり問題があると思うので、この点については後述する。)「自律的個人のきわだった特徴としては、自然的世界や社会的世界の物化が生じないように、自己の実践を通じて人間存在として (anthropologisch) 必然的な対象化に追いつくことができるという点をあげることができよう。この意味においてヨゼフ・ガーベルは、自我の強さと精神分裂病とを両極とする連続体について論ずることができた。」(268)

(四)への注

(1) 既述のように、ドライツェルにおいては個々人はパースペクティヴの相互性によって役割としてのパースペクティヴを取得しうるようになる。これは、相互に役割パートナーの立場を解釈しうる可能性、ひいては相手の身になって考えてみるという可能性がひらけてくるということを意味しうる。ドライツェルは、この相互的な解釈可能性という点を軸に、解釈成立のための一条件としてのパースペクティヴの相互性と準制度的な解釈規範としての相互性規範とを関係づけている。

(2) 彼はまた、この二種類のロール・ディスタンスを、役割に対応するポジションを肯定するか、それとも否定するかという点に着目して、ポジシオン肯定的ロール・ディスタンス、ポジシオン否定的ロール・ディスタンスとも表現している。この表現は、ロール・ディスタンスと逸脱行動との関連をさぐる上で重要な視点を提供する。GLG s.197-8 参照。

(3) なお GLG s. 199 も参照のこと。

(4) ドライツェルが家族という学習環境における体験過程に着目している点は評価すべきだと思うが、そこでの問題のつめ方は不十分としか言いようがない。本文でも見たように、彼は社会化の第一局面における達成課題を(1)社会化された衝動構造の発達と(2)パースペクティヴの相互性への可能性の二点におくわけだが、家族内における相互行為過程が幼児体験の組織化の仕方に及ぼす影響をめぐる諸問題はきわめて重要なだけに、はたしてそうした発想だけでこの問題がとらえられるかどうかはかなり疑問とせざるをえない。家族という学習環境における体験過程をめぐる諸問題に切りこんでいくためには、たとえば、R・D・レーンにおける〈attribution-injunction〉の論理への着目 (R. D. Laing, *The Self and Others* (1961))、子供が自己体験をしていく際のコンテクストとして両親の無意識的願望を重視する M・マノーニの議論 (新井・高木訳『症状と言葉』ミネルヴァ書房)、さらにはリヒターの子供の役割論 (Richter, H-E, *Etern, Kind und Neurose*, Stuttgart, 1963) 等を摂取する形で、対人的な領域での諸問題を展開していく必要がある。なお、後述の、パースペクティヴの相互性に対する批判的コメントも参照のこと。

(5) 私自身は、子供に対する両親の権威の成立のために、そうした一致が不可欠とは考えていない。

(6) ちなみに、ドライツェルは「緊張処理」について次のように言っている。「こうした緊張処理は、個人の役割レパトリの次元ではさまざまな役割を統合し媒介する自我同一性の課題であり、また制度化された役割構造の次元では、組織や第一次集団、とりわけ家族の課題である。」(24)

(7) ドライツェルによれば、「規範の過剰な厳格さ」に見られる抑圧的性格は、そうした役割期待を押しつけてくる側の社会的地位や支配的ポジションを安定化させるのに寄与するものである。

(8) ドライツェルはこれを一種の退行現象とみなしている。なお、彼によれば、現代社会における最も危険な退行形態は、「情動的には中立的で、まったく儀式化されている役割行為が攻撃性をおびた情動的現実と結合する」(256) 場合である。「ここでは、攻撃性は、逆説的にも、「既定の役割執行のための規範」に行為が従う際にしめす感情的な硬直性やひややかさに示されている。情動的欲求は、慣習的な規則や服務規程にのみとづく行動からは排除され、役割行為の外部で、それと共存して、

悪意として顔をもたげてくる。あるいは、指令を遂行する際の見かけ上の情動の欠如のうちにその充足を見いだす。なぜなら、その抑圧的性格は潜在的サディズムに十分見合っているのだから。」(5)

(五)

以上で、ドライツェルの役割論の概要を紹介しおわったわけだが、ここでは、その批判的検討を試みることにする。まずはじめに(一)で提起しておいた役割論自体の分節化という課題に対して、ドライツェルの役割論はどのように応えているのだろうか。私には次の三つが彼の役割論の成果として注目すべきポイントだと思われる。

〈Ⅰ〉、〈役割とそれを担う個人との関係を相対化・分節化している〉

ドライツェルは役割の構成契機として主体的営為と同一化とを役割の中にくみ入れたわけだが、これによって、まず〈役割vs個人〉といった構図自体が相対化されてしまった。さらに、社会的規範の所与としてのあり方と妥当領域という視角からする社会的規範の二重の分節化と対応させる形で主体的営為の度合と同一化の度合を主題化することを通じて社会的役割分類図式が提示され、役割と個人の関係の分節化が遂行されている。

〈Ⅱ〉、〈役割行為がどういう諸条件に規定されて生起するのかという点について見通しを与えている〉

ドライツェルは、役割行為を規定する構造的な二契機として学習環境と相互行為状況を位置づける形でこれを行なっている。相互行為状況論については、役割行為の一般規則を探るといふ観点からある程度の議論がなされていることは先に見た。とりわけ彼のロール・ディスタンス論は注目に値すると思われる。しかし、個人にとっての役割体験の意味を探るといふ観点に立つて、全体としての彼の追求の仕方を見てみると、はたしてどこまで相互行為状況論が

深まったか疑問とせざるをえない。学習環境論の方は、大わくが与えられただけに終わっている。そうした難点が見られるにもかかわらず、役割行為を規定する構造的二契機としての両者の位置づけが与えてくれる見通しの正しさについては評価したい。

（Ⅲ）、〈個人の主体形成過程の問題を役割論の観点から体系的に論じている〉

（Ⅰ）、（Ⅱ）の成果をふまえて、ドライツェルは自我同一性と情動制御の発達段階の体系的議論を展開しているわけだが、おそらくこの点が役割論の展開に対するドライツェルの中心的貢献と言えるであろう。⁽²⁾ 私としては、とりわけ役割レパートリーという発想を大切にしたいと思っている。

とはいえ、ドライツェルの役割論に問題がないわけではない。しかも、それらは、ほかならぬ注目すべきポイントとしてあげた各点のドライツェルによる具体的な展開の仕方に見うけられるのである。そこで、以下主要な問題点にしぼって彼の役割論の批判を試みよう。その際、これまた（Ⅰ）で提起しておいた〈個人にとっての役割体験の意味をさぐる〉という観点との関連で、彼の役割論がどのような問題をかかえているのかという点にも、できる限り言及していきたい。

（Ⅰ）、〈役割分類論に見られる問題点〉

役割期待に占める主体的営為の度合、ならびに役割との同一化の度合いという二つの軸をクロスさせて構想されているドライツェルの役割類型論は、サービン、クレッセンス、ネイデル、バントンの役割類型論を批判的に検討した上で提起されているだけあって、かなり見事なものに仕上がっていることは疑えない。ここには役割分節化のための

すぐれた視点が見いだされる。しかしまた、彼の切り方に問題がないわけではない。そこで以下、各々の軸に即して検討していくことにしよう。

(a) 〈役割期待に占める主体的営為の度合という軸について〉

彼はこの軸を役割分類の視点として導入しているわけだが、こうしたやり方はたして妥当であろうか。組織に係づけられた役割群においては、職種や職務の違いによって主体的営為という契機⁽¹⁾の要求される度合が決められてくるという事情があるから、ドライツェルの視点はかなりの有効性を持ちうると思われる。しかし、人間に係づけられた役割群の場合はどうか。ここでは仮りに親と子の関係における「子供」という役割を例にとって検討してみよう。彼の社会的役割分類図式では、この役割は「社会化される際の役割」に属する。では、この役割は、ドライツェルの主張するようにはたして「既定の役割執行のための規範」に従っていると言えるだろうか。つまり、そこではもっぱら親の命令に服従することだけが期待され「子供」の主体的営為の発揮などまったく問題にならないと言いきれるかどうか。このように問うてみると明らかになってくることは、同じく「子供」の役割といっても、はじめからそうした規範に従っているとは限らないという点である。言いかえると、社会・文化的背景や両親の出身階層等の違いによって「子供」を社会化する際の役割規範は大きく異なるわけだし、またたとえそうした文化的・社会的諸属性を所与としたとしても、特定の「子供」を社会化する学習環境でどのような役割規範が支配的であるか、さらにはどのようなコミュニケーション・ネットワークが存在するかは、個別的ケースでこれまた相当に違っていることが予想される。そして、そうした違いに⁽²⁾応じて「子供」の役割の方も多様なものにならざるをえないわけである。つまり、「社会化される際の役割」一つとってみても、その役割規範はあらかじめ「既定の役割執行のための規範」に限定さ

れているわけではなく、「役割課題達成のための規範」あるいは「役割の個性的形成のための規範」という可能性も存在するのである。こうした議論は、人間に関係づけられた役割群についてはほぼあてはまるように思われる。要するにここで確認しておきたいことは、少くとも人間に関係づけられた役割群においては、役割期待に占める主体的営為の度合という軸は、各々の役割の特質をつめていく際に参考にすべき一視点であって、役割分類の視点としてあらかじめ実体化・固定化すべきではない、ということである。

(b) 〈役割との同一化の度合という軸について〉

既述のように、ドライツェルにおいては、役割との同一化がどれだけ強いかという軸は次のような形で役割規範の由来の違いという視点と完全に重ねうるものとして位置づけられている。つまり、人間に関係づけられた役割群、組織に関係づけられた役割群、状況に関係づけられた役割群という、役割規範の由来の違いにもとづいて分節化された各役割群は、この順で同時に、役割との同一化の度合も徐々に弱まっていくと想定されているわけである。

しかしはたしてそうだろうか。ドライツェルの指摘をまづまでもなく、他の二つの役割群に比べて、状況に関係づけられた役割群において同一化度が最も低い水準に属することは明らかであろう。しかし、人間に関係づけられた役割群と組織に関係づけられた役割群との間の同一化度の違いについては、ドライツェルの議論はあてはまるだろうか。新入女子社員がやむをえず退職するにいたるという、先にあげた例の場合には、確かに、その役割との同一化の度合はきわめて弱いと見てさしつかえないだろう。しかし、たとえば国鉄で、庫内手、機関助手を経た上で何十年も機関士をつとめてきた人の場合、彼の組織に関係づけられた役割と家庭内での夫という、人間に関係づけられた役割とを比べたとして、各々の役割への同一化の度合は、はたして後者の方が必ず強いと言いきれるだろうか。双方の役割群

の同一化の度合の差異は、あらかじめ決着がつけられているというよりも、役割の担い手である個々人のおかれている、もしくはおかれてきた学習環境群とそこでの個々人の関わり方いかんによって、かなり微妙なものとならざるをえないはずである。要するに、役割との同一化がどれだけ強いかという軸で切るやり方は説得力に乏しいということである。

しかし、このことは、役割規範の由来の違いに従って役割群を分節化するという発想自体の否定を意味しない。それどころか、この発想の方はすぐれていると言っている。つまり、役割がうみだされてくる学習環境の違いを何らかの形で分節化して把握するという視点はぜひとも確保しておきたいポイントである。ただし、ドライツェルの分節化でいいというわけではない。状況、組織、対人関係に着目してなされた彼の分節化も一つの試みとしては評価できるが、しかしドライツェルのような分節化の仕方で規範の由来の違いが包括的にカバーされたとは言いがたいし、彼がその分節化に基づいて提起してきた役割類型をもとにして個人の主体形成の問題を論じている点をふまえて言えば、彼のような分節化の仕方ではやはり問題が多いと言わざるをえない。たとえば、ドライツェルのいう組織に関係づけられた役割群においては、集団や組織が制度的に堅固な地位構造をもっていることが前提にされている。しかし集団の中には、そうした堅固な地位構造自体の解体もしくは共同的な(communal)集団形成を志向するもの(たとえばコミュニケーションや住民運動の中にはそうした傾向が見られる)も存在するのである。そうした集団においても、何らかの形で相互の人間関係のあり方を規制する論理とか役割分担(もちろん役割が固定される必要はない)がうみだされてくる可能性はあると見てよいだろう。ドライツェルの役割論においては、「役割の个性的形成のための規範」に規定された役割群という発想もあるわけだから、そうした集団も彼の役割論の中に包摂されておかしくないはずである。

しかし、現実にはそうした集団をめぐる議論はほとんど見られない。これは推測の域を出ないが、多分彼自身の議論の中で扱われるとすれば、こうした集団は青年期の「サブカルチャー」か逸脱的集団として処理されてしまうことだろう。そうした議論展開の仕方がうみだされてくる背景には、関連テーマ群の範囲のヒエラルヒーの議論の仕方に端的に示されていたように、社会の次元と集団の次元との関連づけの仕方に見られる、ドライツェルの議論の問題性がひそんでいるように思う。これを規範の問題にひきつけて言えば、ドライツェルの場合、社会的規範（social norm）が社会の規範（societal norm）と等置されるか、〈societal norm〉の体現として〈social norm〉がとらえられてしまう傾向が指摘しうる。彼の発想からすれば、〈societal norm〉に反する集団の規範はすべて逸脱集団の規範ということになり、したがって現代社会を念頭においた役割類型論としての社会的役割分類図式にはそうした集団規範に由来する役割群は含まれないとされるのであろう。しかし、〈societal norm〉に反する集団の規範はすべてそうした形で片づけることができるのか。私見によれば、ドライツェルの役割論は、実際には個別的な組織や集団の創り出す〈social norm〉の次元での具体的展開を試みているものとして位置づけることができる。とりわけ、ドライツェルが提起している、役割関係を媒介にした個人の主体形成という視点は相当程度まで評価できると思うのだが、この視点をさらに徹底させる上では、〈societal norm〉の体現としてのみ〈social norm〉をとらえて、〈societal norm〉に反する集団規範はすべて逸脱集団のそれとして位置づけるのではなく、〈societal norm〉の体現としての〈social norm〉と〈societal norm〉に反する〈social norm〉の対立的並存状態という視点を確保した上で、さしあたりは〈social norm〉の次元に固執して、〈social norm〉の由来の違いを分節化した方がよいように思う。⁽⁴⁾というのは、先に指摘した共同的な集団における活動や関係性や体験は、単に青年期という一時期や逸脱的集団での出来事に

すぎないといつてすましておれるような代物ではなく、当該社会のありようだけでなく、個人の主体形成の特質を規定する上からも無視しえない重要性をもっているのだから。

(Ⅱ)、〈パースペクティヴの相互性の議論に見られる問題点〉

パースペクティヴの相互性の議論は、ある意味でドライツェルの役割論を支える隅石のような基底的役割を担っている。そのことは(i)これに人間行動の役割としての性格を可能とさせると同時に条件づけている当のものという位置づけを与えていること、(ii)これは相互性規範の生みだされてくる母体としてとらえられていること、(iii)社会化の第一局面における達成課題としてとらえられていること、——こうした点からも明らかである。

ところで、私は先に〈個人にとっての役割体験の意味を探る〉という観点からみた場合ドライツェルの相互行為状況論は深まりを見せているかどうか疑問だと述べておいた。ここでは、その疑問点をこのパースペクティヴの相互性の議論にぶっつけてみることにしたい。

ドライツェルにおいては、パースペクティヴの相互性とは、相互行為状況において自分のパースペクティヴだけでなく相手のパースペクティヴもとれるということ、しかもそのことによって相手の反応がある程度まで予測しうるということを指している。とすると、パースペクティヴの相互性という場合、それは相互に相手のパースペクティヴがとれるという事態を指していると考えてもよいだろう。しかし——これは(i)に関連することだが——なぜ「相互性」を強調しなくてはならないのか。人間行動の役割としての性格が可能となるためには、潜在的可能性として、ある個人が現にとっているパースペクティヴ以外のパースペクティヴをとりうるということだけで十分ではないのか。確かに、相手のパースペクティヴをとれば、相手の反応の予測はある程度まで可能だし、そのことによって相互行為がより

スムーズに進行するだろう。また特定の相手との相互行為過程が長くなればなるほど、そうした予測が高まってくることは疑えない。しかし、そうした予測がなくても相互行為の場に居合わせれば「伝達しないということとは不可能」⁽⁵⁾（You cannot not communicate.）なのだから、まさに「出たとこ勝負」で相手の出方をこちらの準拠枠の中で位置づけながら役割行為するということは十分成立しうる。要するに、役割行為の前提としては、ただ複数のパースペクティブをとりうる潜在的可能性を想定するだけで十分であって、相手のパースペクティブを、しかも相互にとるなと想定する必要はないということである。

画について言えば、ドライツェルはパースペクティブの相互性という課題達成の失敗を第一次的行動障害の問題として位置づけ精神病理学が取り扱うべき問題とみなし役割論としては切り捨てていた。そうすることによって、一九五六年に発表されたG・ベイトソンの「精神分裂病理論の展開に向けて」⁽⁶⁾という論文を画期としてその後展開されてきた、対人的領域におけるコミュニケーション様式や人間形成に関わる広大な問題領域がドライツェルの役割論の射程からはすっぱりと抜けおちてしまうことになる。私がこのパースペクティブの相互性という切り方を中心にすすめることに反対する主な理由はここにある。ここで私が示唆したいことは、自己が現にとっている以外のパースペクティブをとりうる潜在的可能性を個々人がもっている点を確認した上で、それではどのようなパースペクティブをどのような形で獲得してくるのか、その際の対人的布置連関はどのようなものか、といった具合に問題を立てた方が、パースペクティブの相互性を云々するよりも、相互行為状況論を深めていく上ではより生産的ではないのか、ということである。⁽⁷⁾

（Ⅲ）、〈自我同一性の議論に見られる問題点〉

ドライツェルが青年期の同一性形成の問題を(1)最後決定的な自己定義をめぐる危機、(2)性器愛の完成をめぐる対人的危機、(3)職業上の役割において必要とされる自己主張をめぐる危機、と大きく三分節化してそれら三重の危機のりこえとしてとらえていたことは先に見た。同一性形成の中核を形づくっているのがこれらの問題群であることはほぼ間違いないと思われる。そして、青年期にこれらの問題が集中的にあらわれてくるというのも事実である。しかし(1)の「自分は何者なのか」という問いかけは、いつでも生じうることだし、(2)、(3)の問題にしても一応青年期以降ならいつでも問題となりうるのだから、私としては、同一性形成の問題を青年期にひきつけて議論するのはかえってまずいのではないかと考えている。

この点をふまえた上でここで問題としたいのは自己像をめぐる問題である。ドライツェルの場合、大ざっぱに言って彼の提起した九つの役割類型を準拠枠としてそれらとの関連でこの自己像はできあがってくると考えてよいように思う。青年期以降になれば、とりわけ、労働を期待される役割、力量を求められる役割、援助を期待される役割、関わりを求められる役割との関係での役割同一性形成の問題が大切だ、といった議論をしているのだから、こうした想定もあながち見当違いとは言えないだろう。

ところで、先に彼の役割類型論の批判をおこなった際、規範の由来の違いの分節化の仕方にクレームをつけておいた。つまり、彼の社会的役割分類図式からは、共同的な集団形成を志向するような集団における役割群ははみだしてしまうが、そうした集団における活動や関係性や体験は個人の主体形成の特質を規定する上で無視しえない重要性をもっている、というのが批判の要点であった。自己像を議論する際にはこの視点も考慮に入れなくてはならないのは言うまでもない。

しかし、個人の主体形成という問題との関連で言えば、自己像をめぐる問題は、（そうした批判をうけ入れた上で構想されたものであっても）役割類型を準拠枠として設定するだけでは不十分である。ドライツェルは社会的役割関係という網の目の中で自己像の形成や変容を論じようとしているわけだが、そして、そうした論議にはかなりの説得力があることは事実だとしても、しかし、たとえば夢とか瞑想、テレビ・ラジオ、音楽、読書体験、さらには身体の病気等々といった、社会的役割関係の網の目をはずれたところでも自己像の重大な形成・変容が生起するという点も忘れてはならない。つまり、個人の主体形成という問題には役割論には包摂しきれない領域があるということ、しかもこの領域が主体形成のあり方に対して、時には決定的なインパクトを与えうるということを認める必要があるわけである。

最後に批判しておきたいのは、（四）の終りに紹介しておいた、ドライツェルの自我同一性の理想像の把握の仕方である。彼は、個人の自律性との関連で自我の強さと「精神分裂病」を対極においているわけだが、そのことは、自我の強さを十全な自律性の発揮として、他方「精神分裂病」を自律性の欠如として位置づけていると見てよいと思う。また、彼は「精神分裂病」を第一次行動障害と見なしている。もちろん、「精神分裂病患者」と呼ばれている人々が十全な自律性を発揮していると主張するつもりは毛頭ないが、しかしドライツェルがここでやっているように「個人の自律性」という軸だけ分離してとりだしてくるというやり方には、二重の意味で問題が含まれているように思う。一つは、ここには「正常」を問いかえす視点が欠如しているという点である。言いかえれば、「精神分裂病」概念を批判してきた一連の議論の成果がまったく無視されていると言わざるをえない。もう一つは、——先のパースペクティブの相互性の議論に対する疑問と同じ疑問をなげかけることになるが——このように「精神分裂病」といわれる

ものを個人の自律性の欠如として個人次元に環元してとらえてしまう限りは、ベイトソンの二重拘束的状況の議論に代表されるような、家族内コミュニケーション・パターンをめぐる諸問題をわれわれ自身の問題として受けとめるという発想はでてこないのではなからうか、という疑問である。ここでぜひとも確保しておきたいのは、個人の自律性に関する問題を主題化する場合には、相互の人間関係の網の目の中で、集団次元の問題としてとらえるという視点である。

以上、ドライツェルの役割論には、いくつかの問題点が見いだされるわけではあるが、そうした難点にもかかわらず、彼の役割論が非常に高度の体系性をそなえた、それなりに見事な議論であることにはかわりはない。(一)で「どういう形で役割論を展開していけば、われわれが生きている社会の現実を個々人に即して認識していく上で、役割分析的視角が有効な武器になりうるのか、その手がかりをつかむための一つの媒介として、ドライツェルの役割論は位置づけることができるように思われる」と述べておいたが、私としては、(四)で展開した若干の批判を留保条件として追加した上で、そうした位置づけを今一度確認することによって、ドライツェルの役割論の紹介を終えることにしよう。

(五)への注

(1) ドライツェル自身に即して言えば、このあと、役割分析的にアノミーと疎外とを位置づけなおした第六章「アノミーと疎外——行動障害の役割分析に向けて」が続くことになるわけだが(なお、彼のアノミー論、疎外論については、この他に H. P. Dreitzel, *Der politische Inhalt der Kultur, in jenseits der Krise, Syndikat* 1976, s. 50~93 も参照のこと)、^(二) では、そうした議論の前提となる部分(第三章、第五章)の紹介に限定してあることをお断わりしておく。

- (2) ちなみに、H・ヨアスは、ドライツェルの役割論の最大の貢献として、欲求充足の次元を役割論の中にくみ入れたことをあげている。cf) *GLSR* s. 81~83
- (3) cf) Richter, H-E, *Eltern Kind und Neurose*
- (4) ここで「さしあたり〈social norm〉の次元に固執しつつ」と表現したのは、役割論の展開という限定された目標からすれば、の意味である。こうした限定をとりはらって、現代社会のトータルな把握という問題設定をする場合には、当該社会の支配秩序の特質を規定するものとしての〈societal norm〉の性格を追求することは欠かせないし意味があることは言うまでもない。
- (5) Watzlawick, P., Beavin, J. H., Jackson, D. D., *Pragmatics of Human Communication*, New York, 1967, p. 48~51.
- (6) Bateson, G., Jackson, D. D., Haley, J., Weakland, J., "Toward a Theory of Schizophrenia." *Behavioral Science*, 1:251-64, 1956.
- (7) この点より具体的な展開は、R. D. Laing, M. Mannoni, G. Bateson, H-E. Richter, M. Krüll等の議論を検討するという形で別の機会に行なうつもりである。なお、(四)の注(4)も参照。
- (8) この二重拘束(double bind)的状况というのは、注(6)でペイトンらが提起した議論の核心である。彼らはこれを使って、「精神分裂病」と呼ばれている現象に対するコミュニケーション論的なアプローチを試みた。そこからは実りの多い数々の成果がうみだされている。ドライツェル自身の議論の中にも、「アンビヴァレントな状況」という形で、同様な発想自体は見うけられるのだが(*GLG* s. 199)、その掘り下げに成功していないのがおしまれる。
- (9) なお、彼の役割論では、しばしば「役割構造」とか「役割システム」という表現が用いられているのだが、その内容をつめる作業は、少くともこの本の中では十分はたされたいと言いがたい点もつけ加えておきたい。